

## 史料紹介

# 日蓮『二代五時図』の身延山真蹟曾存本

—京都本満寺所蔵の日乾筆真蹟臨写本について—

寺 尾 英 智

## はじめに

京都本満寺には、寂照院日乾（一五六〇—一六三五）筆になる日蓮『二代五時図』の写本一卷が所蔵されている。この写本は、別稿において述べたように、かつて身延山久遠寺に伝えられていた日蓮真蹟を書写したものであると考えられる。<sup>①</sup> その本文は、録内御書はもとより録外御書の諸本にも収録されず、管見の限り単独の写本も日乾写本以外には見当たらない。いわば新出遺文であるといえる。そこで本稿においては、日乾写本『二代五時図』の全体について、日蓮の曾存真蹟を復元する史料の一つとして紹介することにした。<sup>②</sup>

## 一

日乾写本は、料紙九紙を貼り継ぎ、卷子本に装幀されている。このうち末尾の一紙は書写奥書が記されるだけであ

日蓮『二代五時図』の身延山真蹟曾存本（寺尾）

日蓮「二代五時図」の身延山真蹟曾存本（寺尾）

るから、「一代五時図」は八紙に書写されていることになる。料紙は斐紙で、寸法は縦三三・七センチメートル、横は「二代五時図」が書写された第一紙から第八紙までが三七九・八センチメートル、書写奥書のある第九紙が四二・九センチメートルである。本文は他筆を交えない一筆で、日蓮の筆跡をよく模していることが窺える臨写本である。

奥書には、

慶長十四年乙酉五月二十三日

於本満寺玉洞妙院 以

身延山之御正筆謹而

奉写之

寂照院日乾（花押）

と記され、日乾が慶長一四年（一六〇九）五月二三日、京都本満寺において身延山久遠寺の御正筆すなわち日蓮真蹟を書写した写本であることがわかる。

身延山における日蓮真蹟の伝来は、歴代貫首が作成した宝物目録によって明らかにすることが出来る。そこで「一代五時図」について検すると、明応八年（一四九九）に一二世となった日意が作成した「大聖人御筆目録」<sup>3</sup>の追記と思われる部分に「一代五時之図二巻」とあり、二巻の伝来が確認される。

慶長八年（一六〇三）に二世日乾が作成した「身延山久遠寺御靈宝記録」（「御靈宝記録」と略称）では、真蹟遺文を収納する「第一」「第二」箱にそれぞれ一巻の記載があり、「一代五時図」「一代五時鶏図」の二本であったことがわかる。そのうち第二箱の「一代五時鶏図」は、日乾の後住となった日遠によって「御靈宝記録」に、

遠私云此御書者依日乾当山御相統從惣山遂談合被送二遣本満寺一也

と追記され、日乾が身延山二一世貫首に就任した折りに京都本満寺に贈られたことがわかり、慶長一〇年の日遠「身延山久遠寺蓮祖御真輸入函之次第」をはじめ、「御靈宝記録」以降に作成された宝物目録には記載が見えない。現在、本満寺に所蔵されている図二四「一代五時鶏図」がこれである。

一方、第一箱の「一代五時図」は、日遠「身延山久遠寺蓮祖御真輸入函之次第」の「御書等函 第二」に、

一、一代五時図

一

とあり、その後の宝物目録にも同様の記載があることから、身延山に伝わっていたことが確認される（身延山本）。

日乾写本は、本満寺において書写されていること、さらに身延山から同寺に真蹟が伝えられていることから、図二四「一代五時鶏図」を書写した写本であると思われるが、本文を対照したところ別本であった。そこで、改めて身延山本「一代五時図」について「御靈宝記録」の記事をみると、

一、一代五時図

大論云十九出家○

何況曇鸞道綽善導法然

等乎

已上七紙一字不闕也

とある。この「御靈宝記録」に記録されている身延山本の名称、及び冒頭と末尾の本文は、日乾写本と一致する。料紙の紙数も真蹟は七紙、日乾写本は八紙とほぼ同様であった。したがって、日乾写本は、身延山本を書写した写本で

日遠「一代五時図」の身延山真蹟曾存本（寺尾）

日蓮『二代五時図』の身延山真蹟曾存本（寺尾）

あるといえる。

日蓮の『二代五時（鶏）図』は、資料1に掲げるように真蹟諸本が伝わっているが、日乾写本によって伝えられる身延山本の本文は、何れの本文とも異なっている。また、資料2に掲げる写本・刊本によってのみ伝えられる諸本とも異なっており、新出本であるといえよう。

資料1 真蹟本『二代五時（鶏）図』一覽

定本№	名称	系年（定）	系年（対）	紙数	所蔵
図九	一代五時図	文応元	文永八	二〇完	中山法華經寺（広本）
図一三	一代五時図	文永五頃	建治二	一〇完	中山法華經寺（略本）
図二〇	一代五時鶏図	建治元	文永九	一五完	西山本門寺
			或同一〇		
図二二	一代五時鶏図	建治二	建治二	六断	京都妙覺寺
図二四	一代五時鶏図	弘安元	文永二二	七完	京都本満寺
		或同一			
図二五	一代五時鶏図	弘安三頃	弘安二	七完	京都本園寺
断三三九	一代五時図	建治	建治元	二断	真間弘法寺

\*系年の項の（定）は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（対）は立正安国会編『日蓮大

聖人御真蹟対照録』。図二二の（対）は同上編『日蓮大聖人御真蹟目録』による。

紙数の完は首尾完結、断は断簡であることを示す。

資料2 写本・刊本『一代五時（鶏）図』一覧

定本No	名称	系年（定）	写本	刊本
図二八	一代五時鶏図	不明	本満寺録外	録外一五卷
図二九	一代五時繼図	不明	三宝寺録外	録外二卷
図三〇	釈迦一代五時繼図	未詳		録外二四卷

現在に伝えられる日蓮真蹟の『一代五時（鶏）図』は、何れも同一本文のものはみられないことから、特定の祖本あるいは完成本があり、それを日蓮自身が書写したものではない。日蓮は『一代五時（鶏）図』を、機会がある度ごとに新たに執筆したと考えられる。<sup>8</sup>身延山本はこのような『一代五時（鶏）図』に、新たな一本を加えるものである。

二

『一代五時（鶏）図』の系年について、『昭和定本日蓮聖人遺文』（『定本遺文』と略称）では概ね『一代五時図』と題されるものを文永八年（一二七二）の佐渡流罪以前、『一代五時鶏図』と題されるものを文永十一年（一二七四）

日蓮『一代五時図』の身延山真蹟曾存本（寺尾）

の身延入山以後に<sup>1</sup>おいてゐる。ところが、<sup>2</sup>図一三・<sup>3</sup>図二二・<sup>4</sup>図二四・<sup>5</sup>図二五では、資料3に掲げるように、方等部に位置づけられる真言宗の人師の中に弘法大師空海に加えて天台宗の伝教大師最澄、あるいは慈覚大師円仁、智証大師円珍を位置づけている。

図九  
 図一三  
 図二〇  
 図三一  
 図三四  
 図三五  
 断三九  
 身延山本

[illegible]

\*—は記載がないことを示す。

日蓮が「天台の真言」宗である台密を真言宗批判の中に加えるのは、佐渡流罪中の文永九年（一二二二）に執筆された「開目抄」「祈祷鈔」をはじめとするが、簡略なものである。批判が本格化するのには、身延入山後の建治元年（一二七五）執筆「撰時抄」、同二年執筆「報恩抄」においてであり、慈覚大師円仁・智証大師円珍がその中心的対象となる。したがって、「定本遺文」における図一三以下の系年は再考の余地があり、むしろ「日蓮大聖人御真蹟対照録」（「対照録」と略称）の系年に従うべきであると考えられる。

身延山本「一代五時図」では、方等部の下に掲げられる真言宗の祖師に天台宗（台密）の人師である伝教大師、慈覚大師、智証大師が含まれている。また、大般涅槃經を説明する中で諸宗の祖師を列挙する部分にも、

真言宗龍猛・龍智・金剛智・善無畏・不空・弘法・慈覚・智証等乎

と、真言宗の祖師として天台宗（台密）の慈覚・智証が含まれている。このように身延山本では、慈覚大師円仁・智証大師円珍を真言宗の祖師として明確に位置づけていることから、少なくとも身延入山後の年次に系年してよいと考えられる。<sup>36)</sup>

日乾写本から窺われる身延山本の書風の特徴は、真蹟諸本の中では図一三「一代五時図」と最も相似しているとみることができる。図一三の系年は「定本遺文」では文永五年（一二六八）頃とするが、「対照録」では建治二年（一二七六）とすることから、身延山本「一代五時図」の系年も同様に建治二年としておきたい。

日蓮「一代五時図」の身延山真蹟曾存本（寺尾）

日蓮『二代五時図』の身延山真蹟曾存本（寺尾）

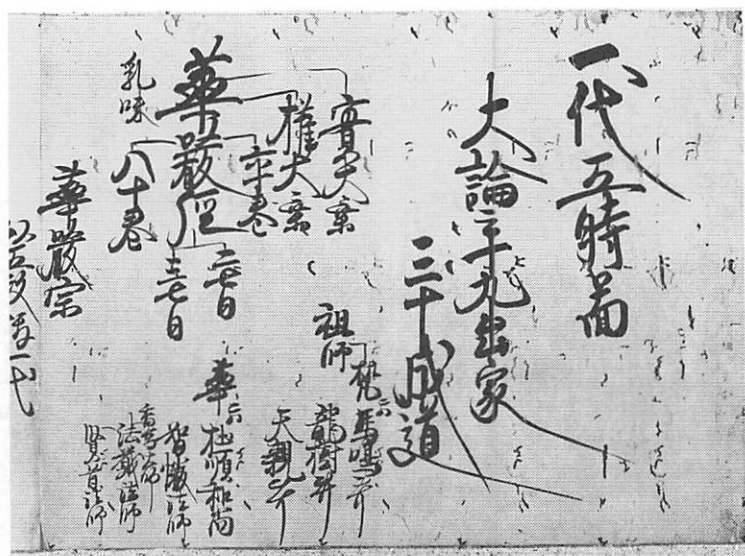
【キーワード】一代五時図・日乾・日蓮真蹟曾存遺文

註

- (1) 拙稿「日乾の日蓮真蹟書写について」、『印度学仏教学研究』第四一巻第二号。
- (2) 身延山真蹟曾存遺文の復元については、拙著「日蓮聖人真蹟の形態と伝来」第四章、拙稿「日蓮遺文『諫曉八幡抄』の曾存真蹟について」（高木豊先生古稀記念論文集）掲載予定）を参照されたい。
- (3) 成立年次未詳。『定本遺文』二七四二頁。
- (4) 同右、二七五一頁。
- (5) 山川智応「日蓮聖人研究」第二巻五四六頁。
- (6) 『定本遺文』二七四九頁。
- (7) 資料1に掲げた外にも、『二代五時（鶏）図』の一部分であると思われる真蹟断簡が数点伝わっているが、断二三九のようにその一部分であることが明確ではないので除いた。
- (8) 宮崎英修氏は、『二代五時（鶏）図』の諸本について、I図示した講義用テキストと考えられるもの（図一三、図二五）、II同上に註を加えて講義に列なれぬ者のために送付したとみられるもの（図九、図二〇）の二様があるようであると指摘される。同「日蓮聖人の門下教育」、『印度学仏教学研究』第二巻第一号。渡辺宝陽「日蓮宗信行論の研究」第三章第一節参照。
- (9) 浅井圓道「日蓮の四箇格言とその心」（一）・（二）、「三蔵」第一七九号・一八〇号。
- (10) 系年の推定に当たり、真言宗以外の祖師や引用要文などについても、全体的な検討が必要である事は言うまでもない。この点については、後日を期したい。

付記 日乾写本の原本調査、翻刻並びに写真掲載については、本満寺貫首三好龍紳祝下の御許可、守玄院御主梅本光祥上人の御高配をいただいた。また、立正大学教授中尾堯先生には、調査史料の発表についてご快諾をいただいた。記して深く感謝申し上げます。

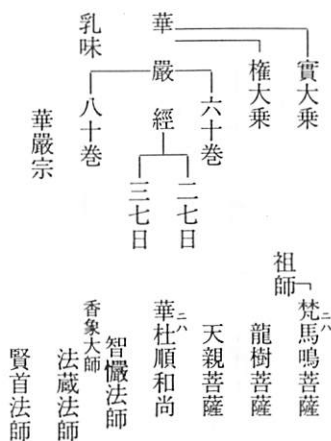




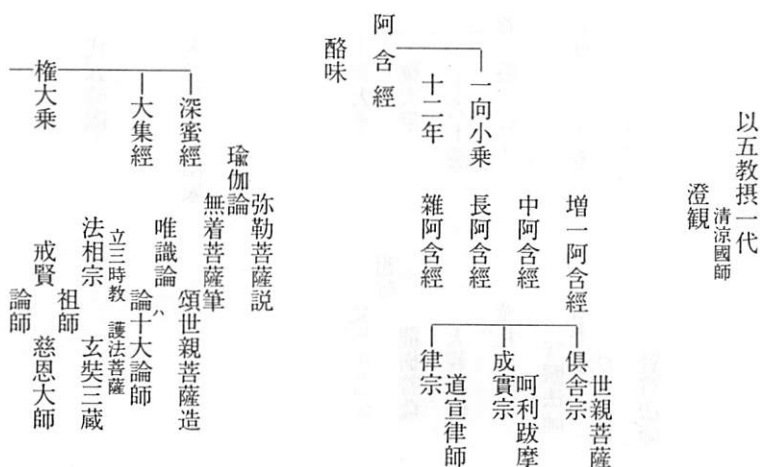
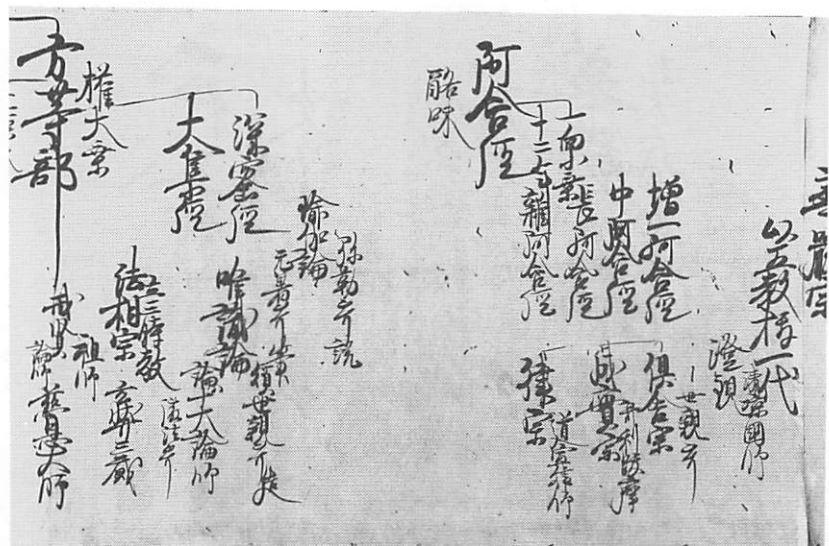
一代五時圖

大論云十九出家

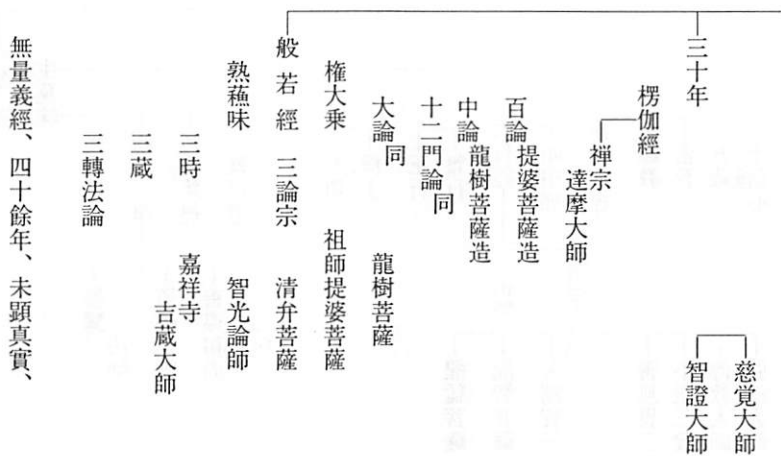
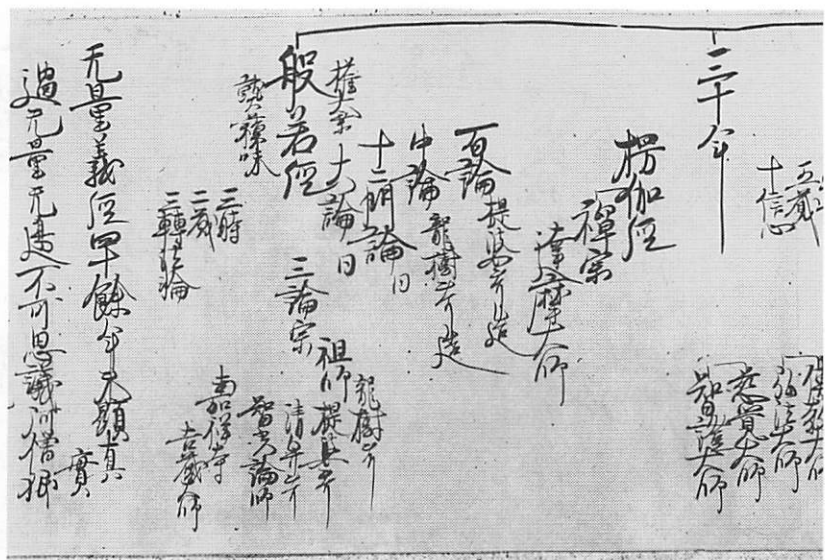
三十成道



日蓮『二代五時図』の身延山真蹟曾存本（寺尾）







過元量元遠不可思議阿僧祇劫、終不得成、無上菩提、所以者何、不知菩提、大直道故、行於險、多留難故、行大直道、無留難故、

世尊法久後

要當說真實

雖示種種道

其實為佛乘

醍醐味

但說無上道

法華經

法華宗  
天竺宗

今此三界皆是我有、其中眾生悉是吾子、而今此處、多諸患難、唯我一人、能為救護、雖復教詔而不信受、

過無量無邊、不可思議阿僧祇

劫、終不得成、無上菩提、所以者何、

不知菩提、大直道故、行於險

逕、多留難故、

行大直道、無留難故、

世尊法久後

要當說真實

雖示種種道

其實為佛乘

正直捨方便

但說無上道

醍醐味

純円經 今此三界、皆是我有、

實大乘 其中眾生、悉是吾子、

八ヶ年 而今此處、多諸患難、

法華經 唯我一人、能為救護、

法華宗 雖復教詔、而不信受、

法華宗  
天台宗  
佛立宗  
其人命終、入阿鼻獄

具足一劫、劫盡更生  
如是展轉、至無數劫

藥王今告汝、我所說諸經、而於此經中  
法華最第一

今時佛復告藥王菩薩摩訶薩  
我所說經典、無量千萬億、已說今  
說當說而於其中、此法華經最為  
難信難解

而此經者、如來現在猶多怨嫉、況滅  
度後

一切世間、多怨難信

今時寶塔中、出大音聲、歎言善  
哉善哉、釋迦牟尼世尊、此公平

天台宗  
佛立宗  
其人命終、入阿鼻獄  
具足一劫、劫盡更生、  
如是展轉、至無數劫、

藥王今告汝、我所說諸經、而於此經中、

法華最第一、

爾時、佛復告、藥王菩薩摩訶薩、

我所說經典、無量千萬億、已說、今

說、當說、而於其中、此法華經、最為

難信難解、

而此經者、如來現在、猶多怨嫉、況滅

度後、

一切世間、多怨難信、

爾時寶塔中、出大音聲、歎言善

今時寶塔中出大菩薩勤言善  
其善哉釋迦牟尼世尊能公平  
等大惠教菩薩法佛所護念  
妙法華經爲大衆說如是如是  
釋迦牟尼世尊如所說者皆是  
真實

一切衆前現大神力出廣長舌重現也  
一切毛孔放於元量無數色光普照莊  
十方世界衆寶樹下師子座上諸佛  
亦復如是出廣長舌放元量光

上行菩薩 無邊行菩薩  
淨行菩薩 安立行菩薩

今時釋迦牟尼佛令十方衆分身  
佛各還本土而作是言諸佛各隨  
所安多寶佛塔還可如故

二句  
等見三下并下  
不用

哉善哉、釋迦牟尼世尊、能以平  
等大惠、教菩薩法、佛所護念、  
妙法華經、爲大衆說、如是如是、  
釋迦牟尼世尊、如所說者、皆是  
真實、

一切衆前、現大神力、出廣長舌、上至梵世、  
一切毛孔、放於無量、無數色光、皆悉遍照、  
十方世界、衆寶樹下、師子座上諸佛、  
亦復如是、出廣長舌、放無量光

上行菩薩 無邊行菩薩  
淨行菩薩 安立行菩薩

爾時釋迦牟尼佛、令十方來、諸分身  
佛、各還本土、而作是言、諸佛各隨  
所安、多寶佛塔、還可如故、

一〇  
依智不依人  
等覺已下等  
不用

依義不依語

依智不依識

依了義經

當說  
一百一夜  
不依不了義經  
早會當知也

# 大般涅槃經

普賢菩薩・文殊師利菩薩・彌勒菩薩等、

何況  
馬鳴菩薩・龍樹菩薩等乎、

何況花嚴宗法藏・澄觀、三論宗嘉祥、

道朗乎、法相宗玄奘・慈恩等乎、

真言宗龍猛・龍智・金剛智・善無

畏・不空・弘法・慈覺・智證等乎、

何況曇鸞・道綽・善導・法然  
等乎、

一切經  
等覺已下菩薩等  
不用

依法不依人

依義不依語

依智不依識

依了義經  
法花經也

不依不了義經

當說  
一一日一夜  
四十余年經也

# 大般涅槃經

普賢菩薩・文殊師利菩薩・彌勒菩薩等、

何況

馬鳴菩薩・龍樹菩薩等乎、

何況花嚴宗法藏・澄觀、三論宗嘉祥、

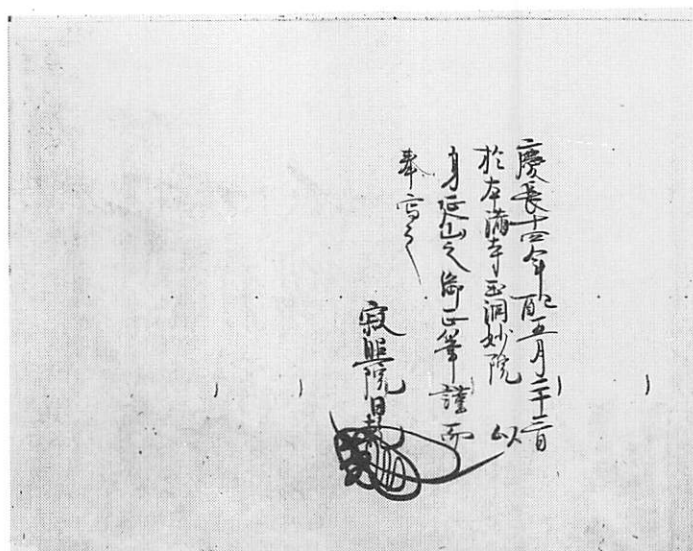
道朗乎、法相宗玄奘・慈恩等乎、

真言宗龍猛・龍智・金剛智・善無

畏・不空・弘法・慈覺・智證等乎、

何況曇鸞・道綽・善導・法然  
等乎、





慶長十四年乙酉五月二十三日  
於本満寺玉洞妙院 以  
身延山之御正筆謹而  
奉写之

寂照院日乾（花押）